

評論・エッセイ部門 課題作品

「昭和が発見したもの」

丸谷才一

『星のあひびき』より

二十世紀は戦争と革命の世紀だと言はれてゐます。二つの世界大戦、イタリアのエチオピア侵略、日本の中国侵略、朝鮮戦争、そして世紀末には湾岸戦争がありました。それに、これは別格として、冷戦といふ戦争もありました。二十世紀の百年間において戦争らしい戦争が無かつたのは、一九二〇年代だけだつた、なんて言ふ学者もゐるくらゐです。革命のほうもすごかつたですね。ロシア革命、スペイン内乱、中国革命。

この戦争と革命の世紀においてじつに多くの人が殺されました。あるアメリカの学者によると、一八一六年から一九六五年にかけての国際間の、国と国との戦争が七十四回ある。その七十四の戦争で死んだ人、死者の数が一番多いのを番付にすると、上位の四つ、すなはち二つの世界大戦、一九三七年から三九年までの日本の対中国戦争、それから朝鮮戦争、この四つの戦争でそれぞれ百万人以上の人間が戦場で亡くなつたと言はれてゐます。戦場でといふ条件つきですから、つまり、たとへば広島、長崎の死者は勘定に入れてないし、東京大空襲も除いての話でせうね。

これは、すごいことでした。これに比べれば、ナポレオン戦争、ナポレオン戦争後の十九世紀最大の国際紛争と言はれてゐる普仏戦争、これは一八七〇年から七一年にかけておこなはれたプロシアとフランスの戦争ですが、この普仏戦争では、おそらく十五万人が死んだだけだつた。十九世紀の戦争がいかにおつとりした、規模の小さいものであつたか、よくわかるでせう。

つまり、第一次世界大戦のはじまりの一九一四年といふのは、大量殺人時代のはじまりの年なのです。かういふ戦争と革命による死者は累々たる死人の山なんです。それに加ふるにナチスのおこなった虐殺がある。それからロシア共産党とコミンテルンがおこなった粛正がある。かういふわけで二十世紀はむごたらしい殺戮の世紀でもありました。この二十世紀の大量死者数は、一億八千七百万人にのぼると見積られてゐるのですが、この一億八千七百万人といふのは、これは一九〇〇年……二十世紀のはじまる前の年、十九世紀の最後の年です。……一九〇〇年における世界人口の一割以上にのぼるんです。十九世紀の最後の年の一割以上の人が二十世紀の戦争で亡くなつた。つまり、二十世紀は人間は極めて残酷な状態、本来ならば耐へられない状態にあつても生きてゆくことができるといふことを我々に教へたし、今もまた教へてゐる。かういふことを言つた学者があるくらゐです。

二十世紀にどうしてこんなむごたらしいことが起つたか、といふ第一の条件、これは科学技術の発達のせいですね。十九世紀の後半に科学技術は飛躍的に向上して、生産力を一挙に高めました。一八五〇年まで、世界における鋼鉄の生産は、総産出額は八万トンだつた。それが、ニッケル製鋼といふ製鋼法が発明されて、一九〇〇年までに鋼鉄の生産は二八〇〇万トンに達しました。ものすごい発達ぶりです。それで、アルミニウムの生産、これも一八八六年に開発された電気分

解法といふ方法が導入されたわけで、急激に上昇しました。そしてちょうどこのころ、アメリカの自転車屋の兄弟であるライト兄弟が飛行機の発明に成功したんです。ライト兄弟がはじめて空を飛んだのは、一九〇三年十二月十七日でありまして、二十世紀は、まあこの時点で始まるって言っていてせう。この飛行機の出現……飛行機といふのはアルミニウムで作るわけですから、アルミニウムの生産が増したと非常に関係があるんですが……この飛行機の出現のせいで、やがて一九四三年のハンブルク市の全滅といふ事件があり、四五年の東京大空襲、広島、長崎の原子爆弾投下が起つたことは言ひ添へるまでもないでせう。この広島、長崎の原爆が代表的であります。戦争は在来のありかたとは桁違ひの大量消費となりました。物量戦争といふ言葉が生れたのも、もつともなことであります。ナポレオンは一八〇六年のイエナの会戦において、わづか一五〇〇発の砲弾で勝利を得、プロイセンの権力を破壊させました。ところが、第一次世界大戦においてフランスは、一日に二〇万発の砲弾を作らなければならなかった。ナポレオンのイエナの会戦での一五〇〇発の砲弾と、フランスが二十世紀に一日二〇万発にのぼる砲弾を作つて第一次大戦を戦つたといふ数字の比較は、十九世紀と二十世紀の戦争の違ひがどんなに大きいかを、じつに雄弁に示すものでせう。

かういふ二十世紀を総括してアイザイア・バーリンといふイギリスの哲学者は、「私は個人と

しては何の苦しみも受けずに二十世紀の大部分を生き抜いたものである。しかしこの一世紀は西洋の歴史において最も恐しい世紀としてしか回想することができない」と言つてゐます。また、リュメ・デュボンといふフランスの農学者が、「私は二十世紀を虐殺と戦争の世紀としてしか見ることができない」と言つてゐます。ウイリアム・ゴールディングといふイギリスの作家……これは例の『蠅の王』といふ長篇小説の作者ですが……このウイリアム・ゴールディングは「今世紀は人類の歴史において最も暴力的な世紀であつた」と言つてゐる。もつと他にいろいろ言はれてますが、もういいでせう。

とにかくむごたらしくて血なまぐさい百年間、それが二十世紀でありました。ところが、いくら二十世紀でも長所がないわけではない。ほんの少し功績はあつた。ピーター・ゲイといふユダヤ系のドイツ人で、若いころアメリカに脱出して歴史学者になつた人がゐます。たいへん優秀な歴史学者でありまして、日本でもたくさんさんの翻訳が出てゐますが、彼がこんなことを言つてゐる。「暗澹たる二十世紀が誇りうるほんの僅かの事柄の一つが、モーツアルトの音楽をそれにふさわしい栄光の位置に押し上げたということである」。これは本当なんです。十九世紀はロマン主義の時代でしたし、市民社会の勃興期ないし最盛期でありましたから、ベートーヴェンが圧倒的

に尊敬され、崇拜されてゐて、モーツァルトは影が薄かった。世紀末にはワグナーが人気を博し、そのあふりでモーツァルトの評判はそれほどでなかつた。モーツァルトの優雅な宮廷主義が軽んじられてゐたんですね。そして彼のオペラは、露骨な、かなり露骨な好色趣味のせいで、軽薄とか、淫蕩とかなんとか悪口を言はれて貶められてゐました。なにしろ十九世紀は、これはイギリス十九世紀のヴィクトリアリズムが代表であります、道学的、倫理的、偽善的風潮の時代でありました。有名な話なんですけれども、ヴィクトリア朝のころは、ピアノの足に覆ひをかぶせてゐた。むき出しにすると下品だといふので、覆ひがついてゐたといふ話があります。そのくらゐ、礼儀正しいといふのかお上品といふのか、さういふ時代だったので。それで、モーツァルトのやうな、まあ天真爛漫といふのか、さういふ人にとつては非常に不利だったわけですね。さういふいはば逆境にあつたモーツァルトを、二十世紀ヨーロッパは救ひ出した。二十世紀においては直前の時代、十九世紀に対する反動が出てきて、いろんな面での反省が生じた。文学でも、絵でも、いろんな面で十九世紀への反動が生じた。その一つのあらはれとしてモーツァルトを救ひ出すといふことが起つたわけです。この二十世紀がモーツァルトを発見したこと、少なくとも再評価したことは、誰も文句をつけることができないでせう。ヘルマン・ヘッセといふドイツの小説家は、モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」について、「人間によつて作られた最後の

完璧なもの」と言つたさうですが、今日、文学の天才の代表がシェイクスピアであるとすれば音楽のそれはモーツァルトであると相場が決つてしまつたやうです。そして、この発見ないし再評価は、それをおこなつた時代……つまり二十世紀ですね……二十世紀が醜悪であり凶悪であり悲惨であつたせいで、いよいよ輝かしく見えるといふ皮肉な話になつてゐます。

ここで思ひ出話を一つ。私は一九三七年、昭和十二年ですね、つまり日中戦争の始まりや、上海事変や、ソヴェエトの大粛正のころ、このころに生れてはじめてモーツァルトの交響曲を聴いて……これは確か『ジュピター』か『プラハ』あるいはその両方だつたと思ひますが……モーツァルトの音楽を初めて聴いた。そして現実といふもの……政治的現実といふものが、こんなに悪質で無惨できたなくて、そのくせ藝術といふものがこんなに美しいといふ対比に、茫然とした記憶があります。そのときのびつくりしたやうな困つたやうな、なにか変な感じ、忘れられません。あれは物心ついて最初のじつに困つた、途方に暮れるくらゐ変な感じでありました。

ここで話はおのづから昭和といふ時代と私との関係のことに移ります。私は一九二五年、大正十四年の生れでありまして、その男の子が持つ最初の記憶、日付のある記憶は一九三一年、昭和六年九月十九日のことです。満で六歳になつたばかりのころです。私が生れたのは雪国の小さな

城下町でありまして、これが近頃は藤沢周平さんのお書きになる海坂藩うなさかのモデルである庄内藩の城下町鶴岡といへば、ぱつと意味が通じるやうになつて非常に便利になつたんですが、この鶴岡で生まれました。その町の町医者の子なんです。その一九三一年九月十九日、六歳の子どもは、午後、祖母に連れられて呉服屋にゆき、退屈してゐました。さうするととつぜん通りが騒がしくなつて、鈴の音がする。呉服屋の小僧たちが出てゆく。やがて一人の小僧が号外を手にして戻つて来て、「戦争だ、戦争だ、オイチニ、オイチニ」と、はしやいでゐました。私はそれを見て、ああ厭なことだなあ、と思つた。そのことが忘れられません。考へてみれば、そのとき私は、出し抜けに歴史的世界のなかへ、引きずり込まれたのであります。言ふまでもなく、これが満洲事変勃発の第一幕となる第一報ですね。私は世界情勢とかなんとかはまったく知らない子どもでありましたが、どうやら生れつき大変な平和主義者、かつ軍人嫌ひであつたやうであります。これは家庭の環境といふこともあつたかもしれませんが、さういふ個性であつたとも言へるでせう。まあその両方ですね。そんな男の子が生きるには、日本の昭和十年代は向いてゐませんでした。その辺のことを詳しく申上げるのは、今日はふさはしい席ではありますので、これきりにいたします。

でも、とにかく私は昭和前半は、非常に不愉快でありまして厭でありましたし、戦争が終つて

からも、これはまあ戦前よりは少しマシになりましたけれども、しかし、非常に愉快といふわけではない。私にとって昭和といふのは、厭な時代でありました。これはたいていの日本の知識人にとってさうだったのではないでせうか。

非常に大雑把な言ひ方をしますと、戦前も戦後も昭和は暗かった。その暗澹たる昭和期にいささかの功績があつたとすれば、それは『源氏物語』を花やかに讃へた時代であつたことだと思ふのであります。かういふ風に言ふとびつくりなさるかもしれませんが、昭和以前において『源氏物語』はすこぶる閑却され無視され蔑視されてみました。あるいは故意に忘れたふりをされてゐた。三矢重松みつやしげまつといふ国文学者がゐます。これは私と同郷の人でありまして、つまり山形県鶴岡の人です。この先生は國學院大學の教授で、折口信夫の師匠筋にあたる。ですから今お話しなされた岡野弘彦さんの先生のまた先生ですね。岡野さんは、この三矢重松先生の孫弟子にあたるわけです。この三矢重松の和歌に、

価なき珠をいだきて知らざりしたとひおぼゆ

る日の本の人

といふ一首があります。これは非常に貴重で値段をつけることができないくらゐる貴重な珠を持つてゐるくせに、それを粗末にした中国の人がゐたといふ、さういふ譬たとへ話が中国にあるのですね。その譬へ話のことは日本人は知つてゐるが、しかし、そのくせ価なき珠、値段のつけやうがないくらゐる貴重な珠にも比すべき『源氏物語』を持つてゐながら、『源氏物語』の価値を知らないでゐるのも日本人である、とまあ、さういつたやうな意味ですね。この歌碑を三矢重松の故郷の鶴岡に建てたときに折口信夫は除幕式に祝詞のりとを宣のりました。これは近代の祝詞の傑作だと思ひます。しかし、ここでは祝詞の話はしないで、この歌に戻りますが、日本人が『源氏物語』を持ちながら、その真価を知らずにゐるといふことを三矢重松はたいへん慨嘆したし、折口信夫はそれに共感した。そのころ、三矢重松が嘆いたり、折口信夫が憤慨したりしたといふのは決して誇張の言ではありませんでした。

『源氏物語』は、国文学者の間では圧倒的に位置が高かつたけれども、それ以外ではほとんど知られてゐなかつた、軽んじられてゐました。しかも、その軽んじる理由が、はなはだ非文学的なものだつた。皇子が天子の后のうきと恋仲になり、子が生れ、その子が帝みかどになるといふ筋ですから、倫理上おもしろくない。けしからぬといふ儒者たちの言ひ分が通つて、それで源氏は貶められてゐ

たのであります。これは江戸時代の通り相場でありまして、たとへば本居宣長の一生は、この誤った考へ方、誤解と戦ふための一生であつたと言つていいでせう。文学作品を倫理的に見て、主人公が立派な人であるとか、親孝行するとか、さういふ、つまり美談の持主である、だからその文学作品は尊いといふやうな考へ方は、幼稚な文学観として非常にあるものなんですけれども、その文学的偏見の一番大々的なのが、この『源氏物語』否定論ですね。

中国人は儒教のせいで、文学において恋愛といふものを非常に軽んじてゐるんです。日本の代表的な和歌の名作選、これはまあ『古今集』にしても『新古今集』にしても、ほとんど大部分は恋の歌、恋歌こひかであります。春夏秋冬と恋と、この四季と恋、これが歌の大部分を占めてゐるわけですけれども、恋歌以外の春夏秋冬のかなりの部分も恋がらみの歌が非常に多い。それ以外の、たとへば雑ぞうの部であるとか、あるいは神祇じんぎとか釈教しやくきやうとか、さういふ歌であつても、恋がらみのものが多い。それが日本の歌の伝統なんです。ところが漢詩の名作選になると、たとへば『唐詩選』、あるいは『三体詩』、さういふ漢詩の名作選には、恋のことを詠んだ漢詩はほとんどありません。わづかに夫婦のあひだの愛情を詠んだものが、ほんの少しある程度で、その夫婦の愛情を詠んだ詩でも、非常に味が淡い。さういふのが中国文学の伝統でありました。『詩経』といふ、中国の大古典、これは儒教以前のもので、恋愛の詩がいつぱいはいつてゐますが、それを儒者た

ちは、恋の詩をいちいち読み替へて、君主と家来とのあひだの愛情の詩だ、忠義の詩だといふふうに解釈し直して、それで講義してきました。さういふまことに滑稽な文学解釈をやつた。

この恋愛文学の否定といふのは、今の中国でもあります。中国の現代小説を読んで面白くないのは、恋愛といふことが大變否定的に捉へられてゐる、あるいは、多少は描かれてゐても、なんだかかう答^とめるべきもの、非難されるべきものとしてつかまへられてゐる氣配が強いからですね。一般にそんな傾向があるやうな氣がいたします。

魯迅といふ小説家は、中国の現代小説をはじめた大變偉い人となつてゐて、その人の書いた『阿Q正伝』といふ短篇小説、これは中国の現代小説の代表みたいなものになつてゐるんですが、この『阿Q正伝』といふのを読んだら、なかに一人村中から馬鹿にされてゐる変な男、つまり阿Qが出てくる。この阿Qがなぜそんなに馬鹿にされて悪いやつとして攻撃されるかといふと、恋愛してゐる、彼が惚れてゐる女の人に付け文をした、それが物笑ひの種となつて輕蔑されるからである。さういふ小説なんです。そのくらゐ中国文学の恋愛否定ははなはだしかつた。中国の大古典で恋愛を扱つたのは、『紅樓夢』といふ小説、これは清代になつてからの小説ですけれども、これが一つあるきりで、それ以外には、恋愛を扱つた大古典はありません。なぜ『紅樓夢』といふ恋愛文学が成立したかといふと、これは清朝の文学ですから、滿洲族の恋愛肯定の風俗が

反映してゐる、そのせいで『紅樓夢』といふ恋愛小説の傑作、中国文学としては傑作ができた、かう言はれてゐます。中国文学としては面白いものですが、われわれのやうに日本の恋愛小説を読んでゐる、あるいは西洋の恋愛小説を読んでゐる、さういふ人間から見ると、まあ大したことはない。別に、ぜひ読まなきやならないものだ、といふ感じはしません。

このやうに江戸時代には、儒者たちがしきりに『源氏物語』を攻撃した。それに対して国学者たちが、非常にがんばつて応援した。かういふふうな対立があつたのでありますが、さういふ儒教的な『源氏物語』についての考へかた、これは明治になつても盛んで、たとへば、森鷗外、夏目漱石、この二人はどちらも明治時代最高の文学の目利きなんです、兩人とも源氏に対して冷淡です。森鷗外は「源氏は悪文である」なんて言つてゐます。そして夏目漱石は『源氏物語』を問題にしてゐません。明治期において注目すべきことは、尾崎紅葉が『源氏物語』を読んで、これに触発されて『多情多恨』といふ名作を書いたことです。この『多情多恨』は、奥さんに死なれた男が、それを悲しみ、悩みに悩んで、泣いてばかりゐて、そのうちに友達の奥さんに惚れてしまふといふ、さういふ筋の小説なんです、これがまったく例外となるくらゐ明治時代の文学者たちは源氏を毛嫌ひしてゐました。

あのころ西鶴は、あはしまかんげつ淡島寒月が発見したせいで、非常に人気があつたのに、どうして『源氏物語』

の光源氏が遇されなかつたのか。これは、やはり、江戸時代以来の儒教的な大義名分論のせいであつた。殊に天皇の后と恋をして、それで生れた子供が帝の位につくといふこの筋が、非常に具合が悪くて、それでまああれだけ虐待されたんでせうね。

昭和八年に『源氏物語』を芝居にするといふ試みがされかけて公演直前まで行つたのに、警視庁が禁止したといふ事件がありました。これは、この辺の事情を大変よく示すものでせう。この『源氏物語』劇化中止事件といふのは、坂東蓑助ほんどうみのすけといふ歌舞伎役者が中心になり、番匠谷英一ばんしょうやえいいちといふ、これは立教大学のドイツ文学の先生ですね、この番匠谷英一が脚色したものを上演しようとして、前売りの切符一万枚を売つたのに、警視庁検閲課に出してあつた台本が、よろしくないと言はれた事件でありまして、その理由はもちろん、国体を乱すといふのでした。

いつたいに戦前の日本は、国体とか、天皇とかを持出せば、必ず勝てるやうな国柄でありました。これを出せば勝負はもうついた、さういふ変な国だつたんです。このことは、このあひだのあの戦争が、はつきり負け戦とわかつてゐるのに、国体をどうするか、それでモタモタして交渉して、それでポツダム宣言受入れが遅れたといふ、あのことでもわかるでせう。国体なんかどうでもいい、とにかく負けました、といふふうに言へば、あの戦争の終り方はもうすこし決着がスッキリしてゐたのに、そのところを国体にこだはつてまづいことをやつたんですね。あの戦

争の終り方でも、国体といふものにみんながあんなふうにとだはるくらゐですから、『源氏物語』なんかひとたまりもなかつたんです。『源氏物語』は国体を乱すものだから、さういふものを芝居に仕組むのはけしからん、それで上演禁止にされました。この『源氏物語』劇化上演禁止事件は、戦前における『源氏物語』の位置をまことによく示すものであつた。

そんなふうになつても、なほかつ『源氏物語』は位置が低かつた。価なき珠を持ちながら、日本人はみんなその価なき珠のすばらしさを知らないでぼんやりしてゐた。この形勢を打開し、打破するきっかけを作つたのは、イギリス人アーサー・ウェイリーでありました。彼は語学の天才で、また文学的感受性が大變鋭かつた。中国語、日本語をよくして、両国文学の名作のすばらしい翻訳をしました。それで、イエイツとかエズラ・パウンドとか、さういふ英米の偉い文学者たちに東洋の文学、東洋の詩の富を教へたんです。ここでは、彼の仕事のなかでの、『源氏物語』の翻訳に話を絞りますが、C・P・スノーといふ作家に言はせると、イギリスでは一九二〇年代の終り近いころ、彼の知つてゐる文学好きの若い人たちは、ほとんど、当時進行中であつたウェイリー訳のせいで『源氏物語』に夢中になつてゐた。このウェイリー訳の『源氏物語』は一九一〇年代からはじまつてゐたスコット・モンクリッフ訳のプルースト『失はれた時を求めて』の影響を受けた訳し方であつた。この英訳は一九一〇年代から出てゐたんですが、その英訳

の『失はれた時を求めて』のせいで、英米の若い読者たちの文学的感受性が洗練されました。そのせいで、アーサー・ウェイリーの『源氏物語』の英訳を受入れることができた。さういふ事情がある。ウェイリーは明らかにモンクリッフ訳のプルーストに影響されるかたちで、源氏を訳したし、そしてモンクリッフとウェイリーが感じたやうに、プルーストと、紫式部には同じやうな文学的資質があつたんです。『源氏物語』には、二十世紀ヨーロッパのモダニズム文学と通じ合ふ、知的で批評的で詩的な、反十九世紀文学的な、モダニズム文学的な要素がありました。あれは十一世紀の文学であります、モダニズム文学でした。

アーサー・ウェイリー訳の『源氏物語』、これを日本のある文学者が読んで絶讃したんですね。その絶讃した人間が、とても変な話なんですけれども、例の自然主義文学の大家であるところの正宗白鳥。彼は昭和初年にヨーロッパにゆくときに船の中で英訳の『源氏物語』を読んで、多大の感銘を受け、絶讃の文章を公表しました。これは人が人だけに意外性が強くて、日本全国に変な衝撃を与へたんです。その衝撃の結果の最大のもは中央公論社の社長嶋中雄作が谷崎潤一郎に『源氏物語』の現代語訳を作らせたことであります。これは最初の版では、例の皇統の乱れのことをぼやかすとか、いろいろ問題があつたんですが、なにしろ谷崎の訳が中央公論社から出るといふので、世間は大変な興奮ぶりを示し、たちまちにして『源氏物語』は現代日本文学の地

つづきの古典といふ、さういふ格の高いものになった。親しみの深いものになった。そして敗戦とともに、軍人が威張ることができなくなり、皇室関係のタブーが解けたときに、源氏は天下晴れて日本文学最高の長篇小説といふことになりました。もちろんこの間にいろんなことがあつたわけですね。たとへば一九六〇年代の全世界的な性の開放。『チャタレイ夫人の恋人』も『ユリシーズ』も、その他、いろんな性、セックスを扱った文学が解禁されたといふやうな形勢、それが作用したことも確かであります。それからモダニズム文学といふものが、全世界的に認められた。ソヴェエト・ロシアも長いあひだ禁じてゐたジョイス『ユリシーズ』を認めるしかなかつた。モダニズムが全世界の文学を支配するやうになつた。まあ、いろんな条件がありましたけれど、とにかく、『源氏物語』は日本文学の大古典であるといふことになつて、みんなが親しむやうになつた。戦後、昭和日本は、やうやく『源氏物語』を発見することができた。そのやうになるに当つては、たとへば中村真一郎、田地文子、瀬戸内寂聴、竹西寛子などといふ小説家たちが、あるいは『源氏物語』を論じ、あるいは『源氏物語』を訳したといふことを無視してはならないでせう。国文学者たちや国語学者の力も大きい。

もちろんサイデンステッカーやドナルド・キーンなどといふ外国の日本文学研究者たちの寄与も見落してはなりません。今は英語だけでなく、サイデンステッカーの新しい英訳が出て、これ

はモダン・ライブラリーにはいつてゐますが、それだけぢやなくて、フランス語訳もあるし、独訳もあるし、いろんな国で、『源氏物語』の翻訳が出てゐます。しかし、最も大きく作用したのは、モダニズム文学といふ二十世紀文学の力、これがじつに大きく作用したと言はなければならぬ。『源氏物語』にはモダニズム文学と通じ合ふもの、たとへば時間を扱ふといふもの、詩や評論を小説自体のなかに織り込む仕掛け、あるいは多様な文体を併せ用ゐてしかもその文体が大変きれいだといふ、さういふ要素があつて、そのせいで現代日本文学の読者たちの心に徹底的な反応を与へることができたのです。千年前の文学者紫式部は、その長篇小説によつて、千年後の読者たちの心を動かすことができたし、今も生きてゐる。かういふ千年前の文学を、現代の読者たちがこんなに読んで親しんでおもしろがつてゐるといふことは、世界中の他の国にはめづらしいことぢやないでせうか。さういふ点でわれわれは、この日本文学の持続性、伝統性を大いに誇つていいと思ひます。